

大都市近郊・過疎村の生き方を考える

元朽木村村長

澤井 功

澤井 功(さわい いさお)

1935年6月生まれ、滋賀県立高島高校商業科卒、朽木農協同組合1年、朽木村役場4年勤務後、大阪いすゞ自動車㈱経理部7年勤務後、家庭の事情で帰村。役場へ再就職。朽木村森林組合再建、ペアリング工場誘致、朝日の森買収、役場庁舎建設、朽木スキー場建設等々のハード事業担当、総務課長5年、収入役5年を経て、55歳で村長に就任。3期12年間、美しいところに安心して楽しく暮らせる村づくりに取り組む。上下水道整備、くつき温泉てんくう新設、特別養護老人ホームやまゆりの里、道の駅整備、朝市の振興、村民ホールやまびこ館、鯖街道整備、村内バス運行、テレビ難視聴解消等々の住民生活に身近な事業整備。全国過疎活性化連盟会長表彰、自治大臣表彰、県ブルーレーク賞等々受賞。

司会 今日のテーマは「大都市近郊・過疎村の生き方を考える」として、現在は高島市になっていますが、合併前の旧朽木村の村長でありました澤井さんをお招きして、朽木村におけるむらづくり、町村合併をめぐってのお話を伺いたいと思います。

澤井さんは若い頃は村を離れて大阪で仕事をされていました。その後、朽木村の職員として仕事をされ、村長になりました。町村合併をするか、しないかという時の朽木村の責任者として苦渋の判断をなさったということでもあります。朽木村で生まれ、育ち、一貫して朽木村をどう持続可能な社会にしていくかということで仕事をされてきた方です。前回は高知県の馬路村の農協組合長をお招きして過疎の村としてどう生き延びていくかという苦心を伺いましたが、今回は京都や大津からごく近いところの過疎村の苦心話を伺えるのかと思います。

会場にお越しの皆さんは旧朽木村のイメージを、それぞれお持ちだとは思いますが、

この村に若い頃からかかわって来られた澤井さんのお話と重なるかどうか、お話を聞いて考えていただければと思います。それでは澤井さん、よろしくお願いいたします。

澤井 この会場では私が一番歳がいつているような感じであります。半世紀以上前の話ができる年になりました。昔話と自慢話をするのは知恵の行き止まりと申します。そのようなことになろうかと思いますが、お許しをいただきたいと思います。6月26日、静岡のあるお寺に寄せていただきました。和尚さんが法話のはじめに「どうぞ足をお楽にしてください。眠りたい方は眠っていただいて結構です」と、このようなことでした。「堅苦しくなくていいな」と思っていましたから「3回欠伸をしたら、その人は3年以内に不幸が生じる」と言われまして、もう欠伸もせず最後まで聴き入っていました。

子どものころ、青年のころ

昭和10年6月、単発のプロペラ機が離陸しまして、上昇するにしたがって戦禍が激しくなりました。昭和20年、終戦でございますが、その後、人並みの学業を終えて、職場はいくつか変わりましたが、おかげさまで水平飛行に入ることができました。嫁さんをお願いまして、子どももそれぞれ結婚して、孫も生まれました。

私の家はサザエさん一家でございます。私は波平さんですが、髭は生やしていませんし、頭髮はまだございます。フネさんもマスオさんもあの姿そのままでございます。ただ派手なのはサザエさんとカツオでございます。相当喧嘩をやったりしております。ワカメ、タラコと、よく似た家族でございます。そんな水平飛行を続けておりまして、私は親からもらったエンジンと機体は案外調子がよく、ダッチロールをしながらですが、今日までやってきました。日本の男子の平均寿命に近づき、いよいよ着陸体制に入ったわけでございますけれども、ローカル空港の短い滑走路に無事オーバーランしないで着陸したいなと思っておるところでございます。

昭和17年、私が小学校に入る年でございますが、親父は出征兵士として出ました。おばあさんと身ごもった母親と私と妹二人、5人半を残していったわけであります。終戦の翌年、昭和21年11月に帰ってきました。今、地震で難儀をされているチモール島に行っていたようであります。

父のいない4年半、私たちの苦労は並大抵のものではございませんでした。母親所帯、今のように生活保護制度ありません

ので、自分たちで山や野や川から食べ物をとってくる。これは都会も田舎も同じだろうと思いますが、大変苦労しました。

農業を少しやっていたので、母親はそれに一生懸命でございました。秋になると供出でございます。政府へ売り渡す米の割当があるわけです。毎夜のようにお寺で皆で会議をしておりました。小学校の4、5年の私に母親は泣いて帰ってきて、その無念を言っておりました。私はその時に大きくなったら復讐してやろうという思いで母親に安心させるように一生懸命に手伝いをしたものでございます。したがって魚とりは上手でございます。今も趣味としてやっております。木に登るのも上手でございました。猿のように柿の木も栗の木も上がって食べ物を得ました。そんな厳しい中で食べ物に一生懸命自分のエネルギーを使ったように思います。母親はまた夜になると私たちの着るもの、履くもの、蔵から古着を出してきてつくってくれました。ぼろを着てでも暖かければ満足とせよ、それ以上のものを望むからむりが生じるんだと。まさにその通りで、けばけばしくする必要はなかったと思います。

私の家はお寺につぐような大きな家で、この家を守るのに大変苦労をしておりました。庭先、家の回りに杉の苔が生えております。それを母親が守ってくれたわけでございます。庭先にある多羅葉（たらよう）の木から大きな葉っぱが落ちると苔が嫌がるという言葉は母親が言っておりました。今、私が掃除している時、いつも母の言葉を思い出して気張って守ってやっております。多羅葉の葉っぱの裏に字を書いたらそのまま残ります。郵便のはじまりです。住むことと食べることと、着ることに、母親

は子どもを3人見ながらやってくれました。学校から帰ってくると、紙包みに、家でつくった醤油の味のおかき、あられがおいてありました。手紙に「帰ってきたらお手伝いをこれをしなさい」と書いてある。そんな環境で育ちまして、私には粘り強い、人には負けるかという忍耐力が母の背中を見てついたように、今、感謝いたしております。

親父が帰ってきましたして楽になりました。甘えて中学校の時は自分の好きな野球、高校も私たちの同級生125人がおりましたが、10人進学しました。あとは自分の技をと大工とか、畳屋さんに就職したり、丁稚奉公、女中奉公に出られた人たちです。毎年集まって、今、昔話をしております。

私はまだ恵まれた方でありました。進学をさせてもらった。そして人並みの学校を終えまして、国家公務員を受けたかったんですが、村を出たら家に残らないということで親父は出してくれませんでした。役場に4年ほど勤めまして、黙って国家公務員の税務職員の初級職を受けました。第一次試験は京都の朱雀高校、第二次試験が大阪国税庁、身体検査と面接と作文と、あの時は指紋をとりました。第三次試験で身元調査で家にきてくれました。その時に親父にバレました。

昭和30年代、神武景気、岩戸景気と言われる時に、どうしても都会に出てみたくて、民間ではございますが、大阪いすゞ自動車に、役場を辞めて入りました。昭和20年代は白いご飯をお腹一杯食べたいという時代だったという方もあります。昭和25年の朝鮮戦争の頃から日本の景気はだんだんと上向いてまいりまして、昭和30年代に入り、今の中国のように家電をはじめ、どんどん

と景気がよくなったのでございます。

大阪で自動車会社に就職

モアの時代、もっともっとという時代と表現されています。その時に私も大阪へ出ました。25歳でございます。大阪いすゞ自動車経理部でした。大阪の自動車産業の大型車はいすゞ車が50%のシェアを持っておりました。その後、ふそう、UDが出ましたが、いすゞ自動車は大阪でどんどん売れました。昭和35年前後、景気のよいことはご承知の通りでございます。会社で努力賞をもうらまで頑張って経理をやりました。私は地方公務員も民間の会社員も経験しておりますが、いずれも社会の歯車の一つでございます。必要なものばかりでございます。

就職したら一生懸命にやる、これが私の子どもの時に培われた根性でございます。努力賞で土産ができましたので2年半ぶりに家に帰りました。あの時分、獅子文六の『大番』という小説が流行りました。村上ファンド、ホリエモンのように株で男が大儲けをする小説でした。『檣山節考』『人間の条件』とかの小説が流行りまして、都会の動きが活発だということで私は出たわけでございます。

7年ほど大阪におりまして、係長にもさせていただき、愛社精神を旺盛にもちました。私だけでなく皆、利益の追求のために一生懸命でした。バスに乗るといすゞの自動車だと「うちの車や」とシートを撫ぜる男性もありました。それくらい愛社精神を持ってやりました。課長が「来週の月曜日に東京へこういう資料を持っていかないといかんから、やれ」と金曜日から会社に泊まりきりで椅子に仮眠して10人ほどでやり

ました。最後までやれたのは二人だけでした。髭は伸び放題、風呂も入らんと月曜日の朝の一番電車が5時10分、ゴーと行く。もういっぺん算盤持ってという力もなくなったくらいでした。あれが仕事をした限界でございました。健康な身体であればできるんだと、親をありがたいと思うようになりました。

朽木村役場に復帰して、がむしゃらに働く

親父が具合が悪くなりまして、どうしても帰らなくいいけなくなりました。家内と相談して帰りました。また役場に出てこいということになりました。一番先に使命を受けたのが森林組合が傾きかけている。理事さんが全部、お辞めになった。一人だけ若いのが残っているから何とか立ち直らせてくれ。森林組合が41、42、43年と林業構造改善事業の指定を受けてやったのが、会計検査が8月にある。4月から行って、それを受けてくれと。

私はまだ素人でしたが、家で相談して行きました。今のフネさんは「あなたは背広を着て毎日いいだろうけど、私は家で百姓をしないといかん。それはかなわん」と。妻の実家は3 kmほど離れたところでしたから村に帰るのは抵抗なかったのですが、嫁さんをもらうときは親をもらいました。20歳の時、家内の親と接する機会が多くありまして「この人の子どもだったらいいな」と。まだ小学校高学年の頃で8つ違いでしたが、「この親をもらおう」と決めました。それを突っ張りまして、よそ見をせずにです。親父が半身不随になって言語障害でしゃべれない、手がきかない。後で私が福祉行政をやる時、ある住民が「お前は福祉のことしゃべれるはずや」と

言うてくれました。

家に帰って森林組合の建て直して、がむしゃらに2年間、出向いたしました。それでちょっと男を上げて、森林組合の再建はうまくいきました。農林中央金庫が京都にありますが、そこで融資を受けた運転資金でやりました。組合には年配で経理だけ高い給料でやっている人がおられました。退職金規程をつくって10万円払って辞めてもらいました。経理は私はできますので、若い人に来てもらって「やってくれ。俺が教えるから」。その女の人は私より一つ上でしたが、20数年間、森林組合をきり回しておられました。テキパキと女の人がやってくれますから職場の雰囲気もよかったです。その女性も去年、お亡くなりになりましたが、しっかりした方でした。

森林組合で男を上げ役場に帰りまして産業課に所属しました。産業課で「工場誘致をやれ」と特命を受けました。今、朽木村にベアリング工場がございます。あの社長が朽木村でやるからということで誘致を交渉して、人もあちこち探しにいきました。京都の醍醐にニチボーの会社があります。その総務課に朽木村出身の人がいるということでスカウトにいきまして帰ってきてもらいました。それも長く総務部長までやった固い男でございました。よくやってくれました。

ベアリング工場の誘致が終わり、次は「朝日の森」用地買収を担当することとなりました。朝日新聞社から140ヘクタールを約6億5,000万円で買ってくるよう言われました。土地所有者が100人近くいらっしゃる。木を毎日査定して歩いて、朝日新聞からは竹中工務店の男を一人出すからとい

うことで、二人で毎日やりました。1カ月かかりました。朝日新聞社は「ヘリコプターを出すからそれで査定を」と言われましたが、できるものではございません。朝日新聞は昭和46年、47年、調子がいい時でした。オイルショックが49年に起こって、それからなかなか朝日新聞は工事に手をつけなかった。51年くらいに着手して、去年で30年間やったからもう目的を果たした、その山を誰か買ってくれ。大きな山をむりして買わせて、朝日の社長も、たくさん代わられました。方針が代わってしまって、私だけが残ったわけです。先鋒でいた私だけが残って、地元からは、あまりいい目をされませんでした。時代とともに仕方がないなあということで終わりました。寂しい思いがいたしました。

公務員としての喜びを発見

公務員というのは自分の思いを人の金で果たせる、私はそういう喜びを持つようになりました。次には「役場の庁舎を建てる担当になれ」と庁舎も建てました。集会所もあちこちにたくさん建てました。役場では出戻りでございますので、私よりも若い人が先に係長になっていました。私は39歳で企画調整係長という職名をいただいて「せめてなりたや、係長」という歌がありましたが、こんなうれしいことはなかったわけです。

「よし、何か村のために考えてやろう」と、村民が何に一番困っているのか。テレビが入らない。上水道がない。家の前まで乗用車が入らない。3つの生活環境整備事業要項をつくりまして、テレビは5戸以上、共同でアンテナを建てる場合は補助しまし

う。水道は3戸以上共同で導水する場合は補助しましょう。道路はただでやりましょう。土地は提供してください。これで最低2メートルの道路が家の前まで全部行くようになりました。何十年もかかりましたけど、10年ほど前に全戸できました。テレビはその後、村長になってから光ファイバーも入れました。難視聴解消です。民放のサテライトを朽木村につくりました。大阪に何回も行きました。読売、朝日、ABC、毎日、琵琶湖放送。この5つでやってもらいました。

これも自分のこれをやろうと思ってやれたおかげだと思っています。達成感是非常に満足なものがございます。難視聴解消の国の補助金があります。村が起債を起こして、それも過疎対策事業債です。過疎債は昭和45年から過疎法ができたことではじまりました。10年の時限立法です。過疎債は70%の元利補給ですので、1億円借りても毎年300万円を10年返せば1億円の仕事ができるわけです。そういうものを利用してサテライトをつくりました。民放5社は使用料を10年分を一度に払うと2,500万円くれました。それを基金にして修理の時に使うことにしました。うまく国の制度を利用すれば事業ができると感じたところでございます。

スキー場は饗庭野の演習場があります。特定防衛施設です。日本平とか富士山のすそ野もそうです。実弾射撃ができる唯一の国の施設ですが、105ミリの特車の弾を今津から朽木村に向かって撃っているわけです。直線で10キロありませんが30キロ以上飛ばわります。飛ばないように調整しています。冗談に「一発落としてくれ」「そんなことをしたら5、6人、クビになる」「それは面倒

みますよ」と話ができるわけです。朽木村にもスキー場があったんですが、標高が低い。230メートルで雪が降らなくなり、またリフトがなかったのです。鉄砲を撃ってくるから危なくて山仕事に入れない。別のところにするんだと防衛施設局に行きますと、「澤井さん、僕、ついていくわ」と担当の職員が言ってくれました。あんなうれしいことはなかったです。彼は東京の市ヶ谷へ転勤で行く時に「東京にきたら市ヶ谷に寄ってください」とうれしい言葉を残してくれました。

57年にスキー場をつくりました。用地は村で買いましたが、総工費1億3,000万円です。9,800万円補助金をいただきました。1億円以上越すと2年にわたります。1億円以内に抑える。残りの3,200万円は過疎対策事業の70%元利補給の起債をする。村の金は1,000万円できたわけです。その後第二リフト、第三リフトをつくりまして、今では今年は1億円くらい売り上げがあると思います。大体スキー場は60日営業したら大万歳です。一番多かったのは1億2,000万円上がっています。雪のない時は1,000万円しか上がらない年もありました。大きく左右するわけです。村の会計と合わせて決算していましたが、あまりムラができますので、放して、村おこし公社で別会計でするようになりました。

スキー場をする時に、私は村長に「ペットボトルの水を一緒にやりたい」「澤井君、どちらか一つにしろ」と。ペットボトルの方は補助金がありませんのであきらめました。また議会から官庁で営利の仕事をするというのは理解してもらいにくいわけでございます。しかしどこかには喫茶店をやっている町村もありました。ゴルフ場を経営

している町村もありました。「朽木村も冬の労務者対策にスキー場はいいじゃないか」と村長にお願いしてできました。今年はホクホクでございます。しかし600万円ほど盗難事件にあいました。日曜日で500万円くらい上がるんです。泥棒はよく知っております。今年はやられました。それで理事長も辞めました。人に危害を与えられなかったので幸いです。

最初にやった頃は面白かったです。宣伝もしてないのに口コミで上がってくる。1万円札がまだなくて、1,000円札で50万円ほどリフト券が売れ、金が入ってくるわけです。お金が面白いほどたまりました。あの時ほど金儲けの楽しみはありませんでした。この頃は1日500万円くらいで、一桁は違いますが、食堂やリフトや貸しスキーを入れてです。そんな仕事も公務員でやれる。資金繰りはそんなに苦しくなくてもできる。これほど気楽な面白い仕事はないわけでございます。

次に行政係、財政係をやりました。財政係もなかなか面白い仕事でございます。市町村が全国に3,300ありました。今は2,500ほどに少なくなりましたが、普通地方公共団体というのは都道府県と市町村です。3,300あるうち、朽木村は人口の少ない方から勘定すると230番目でした。面積の多い方から勘定すると650番目でした。朽木村の人口より少ない町が全国で20ほどありました。お手元に国勢調査の表があると思いますが、昭和35年、朽木村は4,332人でしたが、10年後は3,501人。さらに10年後の55年は2,876人とだんだん減ってきたわけです。昔、朽木村の歌で「戸数800、人4,000」というのがありましたが、今は人口が2,600人を割りました。

村長を3期12年

二人で一人前をモットーにして

平成3年から15年まで村長をさせてもらいました。その間、人口は減っていないと思います。2,600人。私から言えば村長がハッスルしてやっていると、住民もその気になってくれるのではないかと考えているわけです。お父さんが元気でやっておれば子どもも妻もついてくると思います。おとっつぁんが「金がない」と言うと萎縮する。市長だけでなく部長も課長も「金がない」と言っています。私は「住民が要求してくる金はなんぼや」。大抵6桁か7桁です。「ちょっとトロフィー頼むわ」「ここの溝を直してくれ」。50万円か60万円です。「6、7桁で金でないと言うたらあかん」と市長に激励しています。おとっつぁんが「金がない」と言うと嫁さんも子どももウロウロします。「それに使う金がない」という理由を言えばいいのです。職員に「お前、なんぼもらってる?」。課長は800～900万円の所得があると思います。部長はもっと多いと思います。朽木村の場合はラスパイレス指数が90でした。大阪市近辺は110くらいだと思います。人件費率は高いと思います。朽木村は90%。「国家公務員の試験が受かるなら100出す。受からないで入っている。だから90だ」と言いました。県庁は「村長、せめて90を割らんようにしてください」と向こうは机上論ばかりですので。そういうふうになんか強引にやってきました。

経常経費74%台でした。堅実に財政をやって残ったら貯金しておく。合併する時、16億円持っていきました。朽木村は、ようけ持っていく。山もたくさん持っていきま

した。借金は3分の1しか返さなくていい借金がほとんどです。始末はするところはして、無駄なところは省いて、有効なものに使う。母親から「大銭使っても、小銭使うな」と諺をよく言われましたので、そのようにして職員にもやってもらいました。財政をやってきましたのが、商業科でしたので数字は強いけましたので強引なことをやりました。

しかし、住民にはプラスになるように親切に、自分が苦しむようにしなくちゃならないと思って滅私奉公の気持ちを忘れずにやってきました。小さな団体でしたが、黒い車を買ってくれまして、それに乗ってあちこちいくわけですが、専属の運転手はいらない。夕方になれば近くであれば家内に向かいにこさせる。運転手さんに帰ってくれと自分に厳しくやりました。そして家へはよく人をつれてきました。一杯飲むんです。それが私の肥やしになりました。家内は迷惑しているわけですが、「二人で一人前」という線で作ってきました。

選挙の時は楽でした。3回選挙をやりました。1回目はやろうといていた先の方が降りてくださいましたので選挙なしでやりました。信長の本能寺の攻めのように、信長が部下に「寄手の旗印は何ぞや」。部下は「桔梗の紋所にございます」「明智か。詮もなし」。ちょっと横着な言い方ですが、そのような表現で第一回目はさせてもらいました。

2回目は1回目に悪いことをしなくちゃ楽なもんです。町村長は5日間、運動期間がありますが、議員と申し合わせて始めの日、真ん中の日、最後の日と3回にしよう。二日は一服しました。横着な話です。相手の方は5日間やっておられました。来てく

ださる方も、その方が楽です。皆さんに迷惑をかけますので。いつか復讐しようかなと思った子どもの時分、近所の皆さんにお世話になって選挙をしているんです。

3回目は難しいわけです。滋賀県知事は今度、落ちましたけど。初心を忘れずにやることは難しいと思います。ついつい権力もあり、どこに行っても正座に座らせていただいて「へえへえ」、こればかりです。それを調子に乗っていると10年もしたらあたりまえにやってしまいます。それは気をつけないといけない。ある職員が私に「村長、ちっとも、はじめと変わらへんやないか」「ほな、進歩してへんということやないか」「いや、そういう意味と、違うんや」と訂正していましたけど。

私は3回目になっても8年目でも自転車で、家へは絶対に黒い車は乗りつけない。私の起終点は、雨が降っても雪が降っても役場から出て、役場へ帰るということで貫き通しました。皆、よく見えています。家内には迷惑をかけています。二人で一人前。この持論はトルストイの『戦争と平和』の「男の使命は広く、女の使命は深い」。これをアレンジしまして「男は社会と家のために一生働かなくちゃならない」。この主義なんです。女は家庭を守り、可愛い赤ちゃんを産んで立派に育てる。これが女の使命だと。私はこのようにして家内に応援してもらいましたので、大いに助かって、今、こうしてあるわけでございます。

町村合併をめぐる悩み

合併の話が出ました。平成12年くらいに滋賀県は合併パターンを出しました。高島郡6町村につきましては昭和45年、湖西地

域広域市町村圏一部事務組合という組合をつくりまして、消防、ごみ、し尿等を6カ町村で共同処理をするとういことで45年から進めてまいりまして、その後仕事が増えてきました。平成11年、一部事務組合の一段上の湖西広域連合という連合組織に変えたわけです。平成11年11月1日です。県は絶賛してくれました。高島郡だけが先でした。一部事務組合は一杯あります。それから連合に変わりました。

平成12年、県は合併パターンを出しました。今度は合併をしよう。滋賀県で7区域、高島郡は一つになるという合併パターンです。そうなりますと連合がだめになってしまって「合併がいいじゃないか」と。高島市は510平方キロあります。54,000人です。朽木村はそのうちの人口5%、2,500人。アジャスト的な数字だと思いました。合併についてはいろんな要素があるわけですが、「朽木村はこのまま何とか行けないか」という声が多くありました。全部、集落を回りました。婦人会、老人会、青年団にも聞きました。議会が健闘してくれました。

国は「合併は住民が決めるんですよ。あなたが決めてはあきませんよ」が原則です。結局は首長に回ってくるのですが、「合併は、あなたは決めたらあきませんよ」と言われていましたので、賛成とも反対ともせず、住民の意見を聞いて回りました。毎晩です。住民は合併については分からないようでした。平成13年、どういう要素が災いしているか、いいのか、悪いのか。議員は住民の代表だから議員の意見を尊重しましょう。そこへ私も加えてください。12人+私の13人で決めましょう。

「合併したら方がいい」「合併しない方がいい」という両方の理由を書き上げました。

「今回は見合せようじゃないか」という結論に達して、高島市の合併検討協議会があり、その次は法定協議会になるわけですが、法定協議会になってやめるわけにいかないの、入る前に「朽木村は遠慮させていただく」ということを平成14年に決めたわけです。平成15年が選挙でございます。私は出るつもりはありませんでした。3回やらせていただきましたので。ニュートラルにしておいて「次の人が決めたらいい」ということで、法定合併協議会には参加しなかったのです。後に合併させてもらうようになって仲間入りしたわけです。

その時に介護保険法が一番の問題になりました。病院や消防、ごみ、し尿は負担金を持ち寄って朽木村であれば、今まで総額の10%を負担していました、人口は5%ですが。そこへ介護保険が入ってきたわけです。「介護保険の事業主体は連合ではあかん」と厚生労働省はそう言う。連合は特別地方公共団体です。しかし総務省は「いや、いいじゃないか」。結論が出ていないと思いますが、それが一番の住民の不安材料でした。介護保険はあかんとなると合併しないでしょうがない訳です。そういうムードが高まって、一挙に合併の仲間入りをさせてもらい、今、やっております。

私はどちらがよかったか、いまだにわかりません。ただ、もし財政が許されるならば、小さい方が、条件の違う自治体がそれぞれやった方が、フットワークがいいんじゃないかと思いました。合併してもJRの駅や高校は近くなりません。地理的条件は変わりません。合併しても朽木村のようところは雨も雪も多い。気象条件も変わりません。そう考えると、できたらそのまま残ったらよかったのではないかと思います、

問題は財政です。

地方交付税の算定には「基準財政需要額」がございます。「お前のところの村は167平方キロあり、2,600人住んでいて、学校がなんぼあって、橋がなんぼあって、道路がなんぼあって、年寄りがどれだけいて、これだけ金がいる」。それが基準財政需要額であります。それが大体、朽木村の場合は19億円でした。標準財政規模とよく似た額です。一方「あなたのとこすには税があるでしょう」。基準財政収入額がある。固定資産税、住民税、軽自動車税が各市町村や都道府県にあるわけです。それを3億円とします。16億円足らない。16億円を国が地方交付税としてあげようと。

もし地方交付税が減額されても、たとえば「伝染病とか、御巢鷹山に日航機が落ちたように不時のことがあったら県や国にお願いすることにして、日頃の経常的なことは、それでいけるやないか」ということで何とかいけないうか」と試算したこともあります。16億円が13億円になってもいけるか。まず職員の給料費は10数%でした。これが25～30%になると経常経費率が75%以上になって80～85%になると自由に使える金が少なくなる。そのへんをよく考えて、貧乏人は貧乏人の暮らしをするようにやれば、自分のところにあった施策ができると思ったものでございます。

美しい村で安心して楽しく暮らす

今、県道、国道、市道の両側の草を年2回刈るのが精一杯です。県道は2回刈るのをもう一回、村費で刈りました。美しいところにしないといかん。新婚旅行に宮崎県日南海岸に行きました。黒木知事と宮崎交

通社長が一体になって美しいフェニックスを植えて「植えだし、伐りだし」、植えてよくしよう、伐ってよくしようという施策だったと聞きました。その主義でやりました。美しいところに生活すると、ごみもほかしません。車で走っていても快適で、事故も少ない。カーブの見通しが悪いのもいけません。この頃は合併して2年目ですが、2回刈るのが精一杯のようです。

安心は、防災、衛生、保健、地震対策です。地震が起こるかどうかわかんことを考えることはないと思っていました。どこかの市が保存食を買って蓄えておく。期限切れがきて、ほかさないといかんと聞きました。そんな無駄なことをしなくてもいい。朽木村は火事さえ、起こさなんだからいい。家が、たとえ潰れても米は1年分ある。漬物と味噌は桶に一杯ある。梅干しは壺に一杯ある。だから食べるものは1週間も不自由することはない。トイレは掘って建て小屋を畑に建てればいい。水道は止まっても山の水がある。地震のことは考えなかった。ところが県は「お前のところは防災計画が出ていない」と、やかましく言うわけです。「そんなものに1,000万円かけて、コンサルタントに頼まんならん、そんな無駄なことはしない」と県とやりあいました。職員の間は法律はそのまま読んで守っていましたが、長になると、ちょっと無理を言わんと面白くない。法律に「但し書」のない法律はありませんので「但し」というのを使わないといかん。補助金をもらう場合にも「但し」を使ってもらう。これが首長の仕事としてやることだと。職員上がりですので、両方知っています。そんな楽しみを持って仕事をしたように思います。

会計検査をたくさん受けました。会計検

査を受ける人はよく仕事をしているということです。国の補助金をもらってくるわけですから。これをたくさん受ける職員はすばらしいと思います。怒られもしました。しかし不正はしておりません。庁舎を建てた時、2階を庁舎にして、3階を集落センターにして補助金をもらいました。2カ年でやりました。1年目に大雪が降りました。国の補助金の決定が遅い。4月から始めるから9月からでないで補助金が決定しない。雪がたくさん降る、冬にかからないといけない1年目の仕事ができている。会計検査が夏に来まして、仕事はできていますが、雪の中でできていない写真を見せるわけにはいかないので出さなかったんです。きつう叱られました。「ここに揃えておくのが君の仕事やないか」と皆の前で怒られるわけです。これは手元にあっても出しちゃいけない。私は何も不正をしているわけではないので。「雪が降ってできなかった」と言うけど理解してもらえなかったことを覚えております。

余力を残して辞めることも大事

私は「二人で一人前」、こんな人生を過ごしてきました。結婚式は京都の八坂神社でやりました。祀主の須佐命、天照大神と喧嘩をして高ケ原を追い出され出雲の国に流されてヤマタノオロチを退治して天叢雲の剣を取り返し、櫛ナダ姫を助けた勇敢な神様です。そこで結婚式を挙げました。毎年1月3日には「元気しております」とお参りに二人で行っております。一貫して私はワンマンでやってきたように思いますが、人間はいさぎよさ、まだ余力を残して辞めることも大事なことだと思います。新聞沙汰

になっている立派な人たち、いさぎよさがなくてですね。私は男はいさぎよさがなかったらいかん。それと偉くなるとだんだん偉そうになりますが、奥ゆかしさも忘れてはならないと思います。もう一つは礼節。行儀よく、言動を慎むことも大事ではなからうかと思っています。

「いい宝石は泥土の中に入れても、火の中にくべても、その固有の輝きは失わない」という諺があります。そういう人間にならなければなりません。これを現実には私は経験いたしました。結婚指輪をフネさんに渡しました。私はいらないと、そちらの方にその分をかけたわけです。大阪から帰って畑の草をとって、生活環境が変わりましたので、痩せてきた指から指輪が抜けたわけです。どこかで失ってしまった。何年かしてから、鍵にささってきたわけです。なんやろ。あの広い畑からそれが刺さってきたわけです。今も残しております。上等ではございませんが、金です。そのまま、出てきた。人間もそういう人間にならなければならない、このように思っております。

いつも冗談で言っております。遊びをするには3つ条件がなくてはならない。一つは体力であります。若い時は体力がある。暇もある。しかし金の回りはちょっと窮屈です。中年には体力がある。金もちょっと融通がきくようになった。しかし暇がない。これでなければいけない。歳いってからは金はちょっとくらいある。暇はありすぎる。しかし体力がなくなってきた。一生を通じてそんなに遊べるものではないということです。自分の甲斐性にあった遊び方をしなければなりません。

そんな固いことばかりいって君子やったんか。私も息抜きはやっております。なら

ぬ仲云々と俳句に認めたこともありますけど、自分で自分の始末ができなくちゃならないと思っております。田中角栄さん、辻和子さんの本を読みますと、お父さん、お父さんと角栄さんを言っています。あれも罪な遊び方です。そんなことを言うと失礼かもしれませんが、その点、岩崎峯子さんの『祇園の教訓』。信用できる人は「言うこととすることが一緒の人」。きれいに飾った男の人ではない。父ブッシュ、本田宗一郎、出光佐三とかいろんな人と会われているようですが、臭い靴下で来られる人もあるけれど「言うこととすることが変わらない人、金払いをきちっとする人、これほど信頼のできる人はない」。岩崎さんの本にはそう書いてあります。

私は今、神様から権力をとられました。体力もとられました。まだ30キロや40キロの米は担げますけど。年金生活者です。財力、金を稼ぐ時でなければ女性は見向きもしません。男性は女性の尻を追うのではなく、男性が惚れるくらいの男性になれば、女性がついてきます。私は女性の尻は追わないという主義でできましたので、ささやかな人生を送ってきたところでございます。

与えられた時間がきたようでございますので、これで終わらせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

司会 朽木村に伺いまして、できるだけ率直にお話をお聞きしたいという願いをしましたが、率直に話をしていただきました。首長は大都市の首長であれ、朽木村人口2,500人の村長であれ、トップはトップとして思いを持ちながら、ある判断を、まさに最後は孤独の決断をせざるをえない。そのへんの話が言外から伺えたのではないかと思います。同時にいかに澤井さんが奥様

を愛していらしたか、政治家の妻というのは相当苦労されるわけですが、信頼感の中でお二人が人生を全うされているということが、今のお話の中からよく伺えたのではないかと思います。

【質疑応答】

質問 信楽町も特色のある町でしたが、合併になってその後、「お金がない」ということで、あらゆることが縮小されてきています。町民の中で「合併しなかった方がよかったのではないか」という声が聞こえます。財政的にたちいかなから合理化をしないとイケない。マクロに見て、こういう問題に対してどのように変わっていくか、お考えを聞かせていただいたらと思います。

澤井 考え方はいろいろあると思いますが、同じ地域はありません。「ここにはこんなものがあるか、これはない」。いろいろでするので、その地域で「これを重点的にする」ということで首長が予算を配分して全体がもり立てるようにしていけばと思います。一律にやってしまうことは単純な話であって、一律に予算をカットして成功した例はないと。

朽木村は広い。集落が22ありました。「君の地方にはこれは不便だけど、辛抱しろ、これがあるやないか」。同じ公営住宅はこの集落にもあり、あっちもある。一律の家賃にではなく、こちらは所得の少ない、働く場がないところだったら安くしたらいいい。国は一律にするように言います、同じ大きさであれば。それに抵抗してきました。

ゴルフ場の利用税は7段階ありますが、朽木村のように雪の降るところに高いランクに入れたら可哀相です。違う面から応援

してやろう。ゴルフ場の芝生の評価の時、税を下げると。税務課は基準からと言いますが、固定資産税を下げるとかして。水道でもそうです。向こうの水道はお年寄りばかりの所帯だ。かかった費用は1億円で同じだから同じようにすればいいという。それをこの地は不便やけど、安いし、辛抱して住んでいる。そういうやり方でやっていかれたらいいと思います。信楽町は条件もいいですから。

鯖街道の整備の際、私は副会長をして、大津市長が会長でした。きれいになりました。この間、土砂崩れがありました。何カ月も通行止めで「澤井さんやったらどうする？」と。私のやり方は自分の身体も家も一緒。今、何を解決しないといけないう。胃の具合が悪いのは薬を飲んで3日ほどしたら直るだろう。刺がささって痛くて仕方がない。それからとらないといけないう。

朽木村で何が必要か。企画調整係長になった時、3つと言いました。家でもそうです。子どもが保健婦をしていて、なかなか結婚しなかった。最近、パソコンでメールが来ます。「パパに言われた通り、私が心配をかけたの、わかってきたわ」と。その地域で一番困っていることから解決していくのがいいんじゃないでしょうか。

バラ色のようにハウステンボスとか、神近さんという社長が銀行を辞めてなさったけど、借金があるんじゃないですか。できた時は行かれたと思いますが、今は難儀されている。レジャーランドはUFJとディズニーランドくらいで、あとは皆、宮崎県のシーガイア、常夏のハワイが年中ある。今、難儀しています。北海道の占冠村もスキーとゴルフ場と立派なホテルがあるが、難儀している。昭和50年代、国民総レジャー志

向という言葉がありました。じっくり見据えて計画すべきではなかったと思います。富士山は変わりません。静岡と山梨県が特権を持って、そこにしかないものをつくったものが長続きするのではないかと思います。

質問 受益者負担について、お考えをお聞かせ下さい。

澤井 受益者負担、個人負担は大事なことです。それを甘やかしたかもわかりません。8月14日、朽木村で花火を十数年前からやっています。300万円かかるんです、一晩に。最初は観光協会が業者から寄付を集めたりやっていましたが、「業者とそういうことはしない方がいい。そんなに喜ぶなら

村が出しましょう」と。喜ぶものに金を出しても文句は出ません。ほ場整備は5%負担です、朽木村は。国の指定事業は国が50%、県が20%、30%は市町村と受益者が負担します。土地改良は全部5%にしました。大変ですけど、しかし所得の少ないところは安くてもいいじゃないか。何十年かに1回しかしない。15%でしたが、私の時から5%にしました。ほとんどできました。受益者に対して甘くしたかもしれませんが、いま国も自治体も財政難ですので、これからはどうでしょうか。むづかしい問題ですね。

[2006年7月15日]